

第三章 原辭の種類

原辭

原辭 文法學の任務は言語がその最初の單位から説話を成すまでに至る過程を論ずるに在る。そうしてその過程に於て原辭、詞、斷句の三階段の有ることは總論に論じた通りである。斷句とは例へば「紅梅が咲いた」などの如く説話の單位として或る判斷を表すものを云ふ。詞とは斷句を構成する材料として自力で或る觀念を表すものを云ふ。「紅梅が」も「咲いた」も詞である。原辭とは詞を構成する材料として或る意義を表すものを云ふ。「紅」「梅」「が」「咲い」「た」は其れ／＼皆原辭である。

原辭の分類

原辭に完辭、助辭、不熟辭の三種が有る。

完辭

完辭 完辭は原辭の一種であつて其のまゝ詞となり得るものである。例へば「山」「讀む」「頗る」「或る」「嗚呼」などの類がそうだ。一原辭でありながらそのまゝ一詞となる。「山」は一つの名詞であるが「山」といふ名詞は「山」といふ原辭から成立する。「讀む」は一つの動詞であるが、「讀む」といふ動詞は「讀む」といふ原辭から成立する。同じ物の様であるが、觀る方面が違ふ。喩へば一本の丸太が一本橋になる様なもので同じ物であつても丸太と橋と

完辭の品詞別

は違ふ。丸太は材料であつて橋は用ゐられた成果である。

詞の種類に名詞、動詞、副詞、副體詞、感動詞の五種が有つて之を品詞と稱する様に、完辭にも同様な區別が有る。「山」は詞として觀ればその種類は名詞である。「山」を原辭として見たならばその種類は何であるか、之を名辭と云へば適當である譯だが、私は今假に之を名詞と名づけ、詞としての名詞と區別するために原辭としての名詞と云つて置かうと思ふ。又時には名詞的原辭と云はう。同様に

月……………原辭としての名詞

知る……………原辭としての動詞

直ぐ……………原辭としての副詞

或る……………原辭としての副體詞

おや……………原辭としての感動詞

などと云へる。

舊時代の文法學は完辭を單に「言」と稱し、之を體言、用言の二つとした。體言とは活用の無い完辭で、原辭としての、名詞、副詞、副體詞、感動詞が之に屬する。用言とは活用の

權田直助の體言用言

大槻博士の
體言川言
高橋龍雄氏
の體言川言
相言

有る完辭で動詞が之に屬する。現代は名詞をのみ體言と稱し、副詞副體詞感動詞をば體言と云はない様になつた。故大槻文彦博士が此の説を取り、山田孝雄博士などもこれを取つた。高橋龍雄氏は體用の外に副詞副體詞をば相言と名づけて名稱を體、用、相と揃へようとしてゐる。

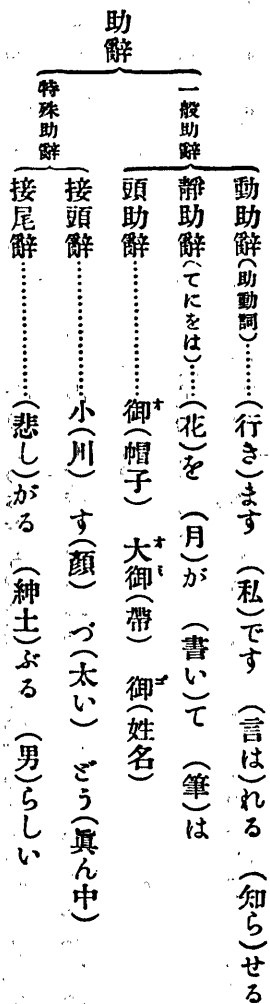
助辭 助辭は原辭の一種であつて自己の力だけでは明確な觀念を表すことが無く、必ず完辭と結合して連辭を成すものである。例へば「花が咲きます」の「が」「ます」の類である。「が」「ます」だけでは明確な意義は表さないが、「花」や「咲き」と結合して「花が」となり「咲きます」となれば、その連辭「花が」「咲きます」も明確な意義が有り従つてその一部としての「が」「ます」には明確な意義が現れる。

完辭はそのまゝでも一詞となり得るが、助辭は自力で明確な一觀念を表さないからそのまゝ一詞にはならない。完辭へ附いた上で完辭と助辭と兩方で一完辭となり然る上で一詞になる。「花が」に就いて云へば「花」は完辭、「が」は助辭、「花が」は連辭的完辭である。連辭的完辭も完辭であるから一詞に成る。

助辭に一般助辭、特殊助辭の二種が有る。一般助辭は更に動助辭、靜助辭、頭助辭の三種

助辭の種類

に分け、特殊助辭は更に接頭辭、接尾辭の二種に分ける。



一般助辭とは詞の一般的性能を表すものである。「行きます」の「ます」は「行く」に對する尊稱であるが尊稱は一般的性能である。「御帽子」の「御」も同様である。「花を見る」の「を」は「花」が「見る」といふ動作の關係物であることを表すが、さういふ性能は極めて一般的なものである。

特殊助辭は用途が狭くその性能が特殊であるものである。「小川」の「小」はその物の小さいことを表すが物の大小などを表すのは文法上の性能としては太して必要なことではない、「悲しがる」の「がる」はさう思ふ意を表すが、文法上一般的なものではない。但し一般と特殊との別は程度の問題である。

動助辭と助詞

動助辭の「動」は働く意味である。之を語尾が働く意と解するのは俗解であつて、實は意味が働く意である。即ち敘述性の有ること動詞の「動」と同義なのだ。動助辭とは敘述性の有る助辭であつて「ます」「です」「れる」「せる」の類がそうだ。「ます」が「ませ、まし、ます、ます、ますれ」と活用する様に動助辭は一般に活用が有るが、無活用の場合も有り得る。

(第二三三頁さう) 故大槻博士が動助辭を助動詞と改稱したことはよくない。

靜助辭と「てにをは」と助詞

靜助辭は敘述性の無い助辭である。「花が咲けば」「月を見て」「が」「は」「を」「て」の類である。活用は無い。大槻派の文法書は靜助辭を「てにをは」又は助詞といふ。

頭助辭と尾助辭

頭助辭は完辭の頭へ附く一般助辭である。それには唯「御帽子」「御靴」「御姓名」「御心配」「大御拾」「大御帶」などの「御」「御」「大御」の三つが有る。從來はこの三つは接頭辭とされてゐたが、この三つは尊稱を表すものであつて尊稱は詞の一般的用法であるから一般助辭の中に頭助辭といふ目を設ける方が善いと思ふ。

頭助辭に對して動助辭と靜助辭とは尾助辭である。

接頭辭と接尾辭

接頭辭は特殊助辭の一種であつて完辭の頭へ接くものである。「小石」「大川」「牡犬」「牝牛」「眞盛り」「生藥」「どう眞ん中」「つ太い」「す足」「そつ首」「屁難かしい」「しち面倒」「小」「大」

「牡」「牝」「眞」「生」「どう」「つ」「す」「そつ」「屁」「しち」などの類がそうだ。これらが頭助辭と違ふ點は文法上に於ける一般的な性能を表すものでなくて特殊な性能を表すものであることに在る。されば頭助辭は用途が廣く、極めて必要であるが、接頭辭は用途が狭く必要の度が非常に低い。

接尾辭は特殊助辭の一種であつて完辭の下へ附くものである。「疵だらけ」「義理づくめ」「意味あひ」「顔つき」「先生ふる」「田舎めく」「西洋くさい」「支那人らしい」「行きながら」「歸りがてら」の「だらけ」「づくめ」「あひ」「つき」「ふる」「めく」「くさい」「らしい」「ながら」「がてら」などの類がそうだ。

接頭、接尾といふことは大槻博士の命名である。これは英文典で附加辭を文法的附加辭と尋常附加辭とに分けることから日本語の「を」「に」などを文法的とし「ふる」「めく」などを尋常とし、尋常なものを接頭接尾の二つに分けたのである。英文典で文法的附加辭といふのは性、數、格、時、比較等文法上の性能を表すものである。eg. of の類である。尋常附加語といふのは文法上の性能でなく唯の意義を表すもので人を表すや、無い意を表す「や」「名詞を作る」「or」や副詞を作る「や」の類である。

不熟辭

不熟辭 從來の文法學は原辭の一種に不熟辭といふものゝ存することを閑却してゐた。

不熟辭とは自己だけでは一詞を成さず、而も完辭や助辭と結合すること無く、必ず他の不熟辭と結合するものであつて、不熟辭と不熟辭との結合した連辭が一つの完辭になるのである。例へば「えん」(鉛)「ひつ」(筆)の類である。「えん」だけでも「ひつ」だけでも一つの詞にはならない。完辭と結合しないから「えん筆」鉛ひつとはならず、助辭と結合しないから「ひつを」「ひつは」「御ひつ」などとはならない。必ず不熟辭どうし相結合して「鉛筆」「亞鉛」「黒鉛」「水鉛」「筆法」「筆端」「鋼筆」「無筆」などとなる。そうなつたものは一つの連辭的完辭である。

字音

漢字の音の日本語に取入れられるものは皆不熟辭として用ゐられる。しかし字音の中には「仁」「義」「忠」「孝」「甲」「乙」「一」などの様に完辭となつてゐるものも多數有る。しかし此等も「仁義」「忠孝」「甲乙」などの様に二字偶用の場合は不熟辭の偶用として用ゐるのである。即ち「仁義」の「仁」と「義」とは不熟辭で「仁義」は連辭の完辭である。

連辭の不熟辭

不熟辭とても、結合したものは連辭の完辭となる場合が多いが、時には連辭の不熟辭として用ゐられる。「殺人犯」「警察權」などは「殺人」「警察」といふ連辭の不熟辭と「犯」「權」といふ

ふ不熟辭とが結合したのである。

漢字音の中には接尾辭として用ゐられるものがある。「濱名湖」「秋葉山」「ヴォルト計」「セセッション式」などの「湖」「山」「計」「式」などはそうだ。

完辭を不熟辭化して用ゐる習慣の有るものもある。「夕刊」「市立」「製パン業」「賣買」など「夕」「市」「パン」「買」などはそうだ。

第四章 活用

第一節 總説

活用は形式的意義の變化を伴ふ。

原辭の中には語形の變化するものがある。例へば「行く」は「行か」「行き」「行け」と變化し、「白」は「しら」となり「國」は「國家」などに於いては「こつ」となる。さういふ語形の變化の中「行く」が「行か」「行き」「行け」となる様な變化は形式的意義の變化を伴ふ。「行く」は意義が終止する位で運用が安定してゐるが「行か」は「行かない」「行かう」などに於ける様に意義が不安定である。「行け」は命令を表す位で意義が放任的である。さういふ様に語形の變化に形